

中国出土資料學會會報

2020年7月23日 第70号

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学東洋文化研究所 小寺研究室内 中国出土資料学会（事務局）

Tel : 03-5841-5843 e-mail : office@shutsudo.jp

<http://www.shutsudo.jp/>

《2019年度第2回大会（総73回）：2019年12月7日（土）於：東京大学》

（Ⅰ）包山楚簡文書類に関する諸問題の検討

柏倉 優一（東京大学大学院人文社会系研究科博士後期課程）

包山楚簡の文書類（「文書簡」）は戦国中期楚国の司法・行政・官制などを示す貴重な史料とであるが、その中には釈読の困難な箇所や解釈の分かれる箇所が少なからず存在する。本発表では包山文書簡の基本的性格を考察した上で、こうした箇所に対して文書簡の総合的分析によって得られる情報に基づいて検討を加え、発表者の見解を提示した。

まず文書簡の基本的性格を分篇、年代、埋葬理由の三点から整理し、文書簡とは持ち主の昭■が晩年に所有していた文書群から断片的に抄録されたものであるという結論を得られた。

続いて包山楚簡の中から人物名、人物呼称格式、官職・官府名、地名、地方行政単位名の全データをそれぞれ収集・整理し、このデータに基づき、上述の文書簡の断片性を念頭に置きつつ、文書簡にみえる人物呼称、官職・官府名、地方行政単位名に関する諸問題の検討をそれぞれ行った。

その結果として人物呼称に関しては「人名+（之）+官職名+人名」が「某人の管領地・封地の某官職に就く某人」を表し、「人名+（之）+大夫/人+人名」が「某人に対して名籍登記上の従属関係・同族関係にある某人」を表し、名籍上の従属関係とは言ってもその実態は多様であったという結論を得られた。

官府・官職名に関しては「地名+令」「地名+正」が従来言われた地方の管領者を意味するわけではなく、令や正が特定の職掌を帯びた官職であることなどを指摘した。

地方行政単位名に関しては陳偉氏による包山文書簡所見の地方行政系統の復元が整然とした系統を想定しすぎてかえって実態と乖離していることを指摘し、実際の地方行政は県一邑と県一里の系統を基本とし、その間に種々の行政単位や領域編成が複雑に入り組んだ形で存在していること、この他に中央に直属する地方行政単位として州と敵があることを結論として導いた。

（Ⅱ）古注本《蒼頡篇》考

苗 壯（東京大学大学院人文社会系研究科外国人研究員）



古注本《蒼頡篇》與《爾雅》並稱“蒼雅”，是六朝至於隋唐時期最重要的訓詁書。不過檢索漢唐書志，並無單獨題名為《蒼頡篇》的訓詁書。為此，論文首先梳理了漢唐書志中與《蒼頡篇》相關著作之間的關係，將之劃分為“習字書”和“訓詁書”兩個系統；其次，通過古注本《蒼頡篇》中“絳，絳縣在河東”、“碭，梁国若碭縣之也”、“壑，大阜，在左馮翊池陽縣北”三條具有地域隸屬關係佚文的考察，推定古注本《蒼頡篇》形成的時間上限不會早於漢武帝太初元年設置左馮翊之時，下限不會晚於東漢更名絳縣為絳邑（絳邑縣）之時。隨後，通過佚文的對比，認定古注本《蒼頡篇》應該就是杜林的《蒼頡訓詁》。

從形式上看，古注本《蒼頡篇》採用了隨文注釋的形式，並有以反語注音的現象，說明在東漢之後，曾有學者對之做過一定的補充。從該書形成的過程來看，由於“《蒼頡》多古字，俗師失其讀”，漢宣帝朝，朝廷徵召了一位尚能正讀《蒼頡篇》的齊人，由張敞協助他整理出來了古注本《蒼頡篇》最早的訓釋本，即齊人訓釋本。《漢書·藝文志》中著錄有《蒼頡傳》一篇，未題撰人，非常有可能就是此書。隨後，訓釋《蒼頡篇》的學問成為張氏家學，又傳給杜氏。杜氏的家學傳至杜林，形成了新的注釋本，即杜林《蒼頡訓纂》《蒼頡故》。在平帝朝時，朝廷再次對《蒼頡篇》進行整理，其成果之一即是揚雄的訓詁書《蒼頡訓纂》。在漢末至於東晉的某個時間，揚雄的《蒼頡訓纂》也被整編到杜林的著作之中。此後，古注本《蒼頡篇》也大體定型，即見諸隋唐書志的杜林《蒼頡訓詁》二卷。

（Ⅲ）「趨同」還是「立異」？以安大簡《詩經》「是刈是穫」為討論的對象


蘇 建洲（臺灣彰化師範大學國文系教授）


裘錫圭先生曾指出：「在將簡帛古書與傳世古書(包括同一書的簡帛本和傳本)相對照的時候，則要注意防止不恰當的『趨同』和『立異』兩種傾向。」本文以安大簡《詩經》與《毛詩》中〈周南·葛覃〉：「是刈是穫」一句的異文為例，討論其中所反映出的文字、訓詁等相關的議題。

本文主要觀點認為傳統注疏對「是刈是穫」的解釋正確可從，安大簡《詩經》「是是」

也應該釋讀為「是刈是穫」。「」當隸定為「」，其中「」是「」之省，讀為「穫」。

「穫」可同義換讀與「刈」。研究者或將「」的「」旁釋為「列」或「刈」，字形上都沒有依

據。其次，「」當從《毛詩》本讀為「穫」，孔《疏》云：「葛既成就，已可採用，故后妃於是刈取之，於是穫之。」將葛藤由「割取」、「穫之」，最後製作成「絺」、「紵」的過程寫得傳神，十分

可信。研究者將「」讀為「穫」，認為《詩經》本當作「是刈是穫」，「刈」、「穫」是同義的關係，本文認為這種說法屬於不恰當的「立異」，實無必要。

《特別寄稿》

「東北アジア青銅文化比較研究国際学術シンポジウム」開催報告

劉 海宇（岩手大学平泉文化研究センター教授）

東北アジア青銅文化比較研究国際学術シンポジウムは、岩手大学・河南省文物考古研究院・北京大學出土文献研究所・日本中国出土資料学会の共催で2019年12月に岩手大学（盛岡市）教育学部北桐ホールで開催された。12月13日は現地登録日、翌14日と15日の午前中は会議日、15日の午後はエクスカーションとして岩手県立博物館の研修室にて中国古印資料調査会を行った。

このシンポジウムには、日中韓三カ国における二十数か所の研究機関の研究者計34名が一堂に会し、基調講演・考古新発見成果発表および研究発表を行った。発表者のほか、全国からの研究者及び岩手大学学生諸君の出席を得て、延べ120名以上の方々にご参加いただいた。

なお、中国の研究者が東京の公私機関に収蔵されている中国古代青銅器等を調査したいという事前情報により、それぞれの収蔵機関と連絡調整を行い、登録日の午後及びシンポジウム終了後の三日間に渡って、資料調査を行った。ここでは、その調査状況についても合わせて報告したいと思う。

以下、国際シンポジウムのプログラム及び東京における中国古代青銅器調査の状況を報告しておく。

12月14日（土）（敬称略）

【午前の部】司会：藪 敏裕（岩手大学副学長）

10：00—10：20 開会の辞

岩渕 明（岩手大学学長）、朱 鳳瀚（北京大学教授）、小寺 敦（日本中国出土資料学会副会長、東京大学教授）、楊 文勝（河南省文物考古研究院副院長）

10：20 集合写真（写真1）

10：30—12：00 基調講演

10：30—11：10 朱鳳瀚：漢以前の中國北方與歐亞草原

11：10—12：00 難波洋三（奈良文化財研究所客員研究員）：弥生時代における銅・鉄・朱の輸入とその交換財

12：00—13：00 昼食

【午後の部】司会：藪 敏裕（岩手大学副学長）

前半 13：00—14：00 考古新発見成果発表

13：00—13：30 樊温泉（河南省文物考古研究院研究員）：近年河南地區兩周青銅器考古新発見

13：30—14：00 韓輝（山東省文物考古研究院副研究員）：近年山東地區商周青銅器考古新発見

後半 14：10—17：30 小組研究発表

第一小組 考古及び遺物班 司会：曹瑋（陝西師範大学歴史文化学院教授）、下田誠（東京学芸大学次世代教育研究センター准教授）

① 曹瑋：從盤龍城商代墓葬隨葬銅器看商代早期器用制度的形成與特點

② 楊歡（西北工業大学文化遺産研究院副教授）：商周青銅器中的四瓣目紋研究

- ③ 張翀（中国社会科学院古代史研究所副研究員）：桃花者村銅觥及晉陝觥器再考察
- ④ 楊博（中国社会科学院古代史研究所助理研究員）：周人貴族墓葬青銅禮器器用的二系分途
- ⑤ 陳艷（鄭州大学音楽学院教授）：許公墓青銅甬鐘音樂学探賾
- ⑥ 孫思雅（北京大学歴史学系助理研究員）：青銅樂器自名時地特徵探析
- ⑦ 左長纓（寧夏巖畫研究中心副主任）：商周時期人面紋像比較研究
- ⑧ 谷口滿（東北学院大学文学部教授）：欣賞巴族青銅器—關於虎鈕錚于盤部圖案的幾個思考
-
- ⑨ 陳穎飛（清華大学出土文獻研究與保護中心工程師）：日本学者研究中国青銅器的發展歷程管窺

第二小組 古文字及び古文献班 司会：嚴志斌（中国社会科学院考古研究所研究員）、角道亮介（駒澤大学文学部准教授）

- ① 嚴志斌：先秦觚爵名物探論
- ② 陳東（曲阜師範大学孔子文化研究院教授）：出土文獻與漢畫像石“周公輔成王”的釋讀
- ③ 陳英傑（首都師範大学文学院教授）：談青銅器私名定名問題
- ④ 胡寧（上海大学歴史系副教授）：金文“亞祖”考
- ⑤ 小寺敦（東京大学東洋文化研究所教授）：清華簡『繫年』を中心としてみた楚地域の歴史觀
- ⑥ 劉源（中国社会科学院古代史研究所研究員）：商周青銅器功用的變化及其對金文內容的影響
- ⑦ 李裕杓：（韓国東北アジア歴史財団研究委員）：不其簋為秦器說獻疑
- ⑧ 藪敏裕：『詩經』魯頌閟宮篇に見える「万舞」
- ⑨ 趙燕姣（山東省社會科学院副研究員）：從班簋銘看典籍中的徐偃王

18：30—20：30情報交換会

12月15日（日）研究発表 09：30—12：00

第一小組 考古及び遺物班 司会：陳英傑、谷口滿

- ① 鄭鉉成（韓国嶺南大学文化人類学系博士研究生）：遼西地域青銅文化的成立與變遷
- ② 下田 誠：明治大学博物館藏銅戈考
- ③ 黎婉欣（北京大学文博学院副教授）：夏家店紋飾研究
- ④ 張海（河北大学歴史学院講師）：邾器與兩周邾邦史事
- ⑤ 喬軍（鄭州大学歴史学院博士研究生）：漢代甬鐘的考古學研究
- ⑥ 楊文勝：何以為“器”？“器”以為何？—從青銅器與祭祀關係看東北亞青銅文化的共性與個性

第二小組 古文字及び古文献班 司会：劉源、小寺敦

- ① 松村一徳（シールロード研究所所長）：依據金文“擇其吉金”的斷代辦法試論
- ② 朱羸（北京大学歴史学系助理研究員）：中山王器銘所見的訓誥特色
- ③ 楊坤（北京大学歴史学系助理研究員）：師鬲鼎“作公上父尊于朕考郭季易父鞮宗”解
- ④ 謝能宗（中国人民大学国学院助理研究員）：西周金文中“鄙”字指代的空間範圍

⑤ 角道亮介：西周金文と“宗周” —考古資料からみた周原遺跡の都市構造—

⑥ 劉海宇：説西周金文中的所謂“訊”字

12：00—13：00 昼食

13：30—15：00 岩手県立博物館蔵中国古印資料調査会



写真1（参加者集合写真）



写真2（明治大学博物館蔵青銅器調査）

上述の通り、今回のシンポジウムは、日中両国の研究機関の共催によるもので、日中韓三カ国の研究者が参加する国際学会であった。まず基調講演が行われたのち、次に河南省及び山東省における商周青銅器考古新発見の発表となり、その後「考古及び遺物班」小組と「古文字及び古文献班」小組とに分かれて論者それぞれの研究発表が行われた。研究発表は、東北アジア青銅文化研究を中心に、新出土青銅器や金文資料を手掛かりにし、墓葬・遺跡等の考古発掘成果を参照しながら、東北アジア地区の青銅器及びその時代と地域特徴・副葬品の組み合わせ・礼器制度・工芸技術等の諸関連問題に議論を展開した。

また、朱鳳瀚教授より、今回の国際シンポジウムを皮切りに、今後は日中韓三カ国の研究機関の回り持ちで「東北アジア青銅文化比較研究国際学術シンポジウム」を開催することが提案され、参加者の間で意見が一致した。

12月15日の午後、岩手県立博物館にて古印調査会の終了後、中韓の研究者二十五名に楊文勝氏（2019年5月から12月まで岩手大学に客員研究員として滞在）と劉を加えて新幹線で東京へ向かった。その後、16日から18日にかけて三日間にわたる中国古代青銅器調査を行った。以下、13日登録日の調査も合わせて時系列順に振り返ってみたい。

12月13日（金）

楊と劉がそれぞれ成田空港と羽田空港で迎えたあと、東京駅で角道亮介氏と合流。荷物を一時保存した後、角道氏に案内していただき、泉屋博古館東京分館へ向かう。16:00前後より、同館にて「金文—中国古代の文字—」展覧会を見学。下田誠氏より招待券12枚をご恵贈賜り、不足の分は廣川守館長より観覧料の免除に便宜を図っていただいた。本展覧会では、商代後期から前漢後期までの有銘青銅器70点近くが並べており、特に筆を用いて泥水を付けてそれを中子上に塗り重ねて凸の文字を得る方法で成功した殷周金文の復元鑄造が紹介された。偶然にも、今回のシンポジウムの趣旨に相応しい展示会であったため、参加者より高く評価された。

17:00 見学終了。東京駅に戻り、一時保存した荷物を受け取り、東北新幹線で盛岡へ向かった。

12月14日（土）—15日（日） 既述の国際シンポジウム。15日の夕方、東京へ。

12月16日（月）

10:30 東京大学考古学研究室に到着。同研究室助教の石川岳彦氏に迎えられ、まず考古資料室に案内された。参加者が多いため、二つの班に分かれて交替して調査した。資料室には、中国大陸や朝鮮半島の青銅器資料が多く保存されている。その後、石川氏に便宜を図っていただき、工事のため閉館中の総合博物館に保管された魯国故城出土の瓦当等を調査した。

12:30 留学生袁也さんに案内してもらい、安田講堂の地下にある「中央食堂」で昼食。

14:00 明治大学博物館に到着。同文学部石川日出志教授と石黒ひさ子講師に迎えていただき、まず常設展を見学した後、次に研修室にて同館所蔵の中国古代青銅器を特別調査した（写真2）。鼎・爵・劍等の青銅器が数多く並べられており、参加者は思う存分に実見した。

16:00 徒歩にて神田古書店街へ行き、自由参観して、各自でホテルへ帰った。

12月17日（火）

10:00 根津美術館に到着。石黒ひさ子氏と大石泰夫氏（國學院大學文学部教授）と合流して入館。同館顧問の西田宏子氏に迎えられ、ロビーにて美術館の概要を説明していただいたのち、館内を自由参観した。2階の展示室殷周青銅器が陳列されており、とくに伝殷墟侯家莊大墓出土の70センチ以上もある「饗鬶紋方盃」三器が印象的であった。図録によれば、この三器にそれぞれ左・中・右の銘文が持ち手内側の器表面に入っているとされるが、目視では確認できなかった。1階の売店で図録等を購入したのち、11:30 見学終了。午後は、出光美術館へ青銅器の調査を行う予定だが、当館の規定により、1回につき見学者4名まで調査資料5点までという条件が加えられたため、2班に分かれて行動した。

1班は、大石泰夫氏に案内していただき、國學院大學へ行って同大学博物館を調査した。新天皇の即位に合わせた「大嘗祭」の企画展が行われ、江戸時代の資料を中心に、大嘗祭に関する絵図・古典籍・模型・古文書等が並べられ、印象深い展示会であった。國學院大學の学食で遅めの昼食をとったのち、解散して各自行動。その中、楊文勝氏・張海氏・謝能宗氏三名は江戸東京博物館へ行き、江戸城の街並みを中心とする展示を見学した。見学終了後、ホテルへ向かった（謝能宗氏「日本紀行（三）」を参照）。

2班は、朱鳳瀚教授・黎婉欣女史・陳穎飛女史に劉を加えた4名で出光美術館三鷹分室へ向かった。13:10、三鷹分室に到着。学芸員徳留大輔氏に迎えられ、大下芳博分室長に表敬訪問した後、研修室にて図録『悠久の美—唐物茶陶から青銅器まで—』に基づいて事前に調査希望を出したもので、図録の141番「銅象嵌狩獵文有蓋壺」・134番「鴟鵂卣」・135番「饗鬶文兕觥」・111番「饗鬶文方尊」・117番「饗鬶文方壺」五点を実見した。15:15、見学が終わり、東京へ向かう。16:30、ホテルに到着。

12月18日（水）

10:00、東京国立博物館西門に到着。特任研究員の谷豊信氏に迎えられ、館内に入った。各自にて平成館にける日本考古展と東洋館におけるアジアギャラリー展を見学した。劉は、午後5時限目に授業があるため、11:30に皆さんと別れて12:26上野発の東北新幹線で盛岡に帰った。午後、楊文勝氏は、皆さんを案内して市内見学した。これですべての調査が終了した。

2012年以来、朱鳳瀚教授は、「海外中国青銅器調査」研究プロジェクトを担当しており、近いうちに上海古籍出版社より『海外中国青銅器集録』が刊行される予定である。今回は、日本関東地区における中国青銅器の所蔵機構を中心に調査し、日本に所蔵される中国古代青銅器の一部を実見することができたことは貴重な経験となった。

《学会彙報》

○大会委員会より

(1) 2019 年度第 2 回大会（総 73 回）が、2019 年 1 2 月 7 日（土）、東京大学を会場に開催されました。

○会報委員会より

(1) これまで会報（年 2 回発行）は国内会員等に対して郵送して参りましたが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により当面の発送作業が困難なこと、また中長期的に見て経費節減が求められること等の理由により、今年度からはこれを学会ホームページにおいて公開し、郵送は取りやめることといたします（7 月 5 日開催の今年度第 1 回理事会における決定事項）。なお、発行回数や掲載内容等については特段の変更点はございません。会員の皆さまにはたいへんご不便をおかけいたしますが、何とぞご理解賜りますようお願い申し上げます。

なお、会報発行の際にはこれをメールでお知らせするなど、引き続き広くお読みいただけるような工夫をして参りたいと思います。事務局にメールアドレスをご登録いただいていない会員の皆さまは、ぜひこの機会にご登録ください。

(2) 2012 年 7 月 21 日に開催された臨時総会において、「中国出土資料學會著作権規定」が承認され、即日施行されました。本会報については第 46 号（2011 年 3 月発行）から同規定が適用されます。対象となる各号掲載の著作物の利用に際しては、同規定の定めるところにより処理されることとなりますので、希望される方は、HP 掲載の利用申請書をダウンロードして事務局まで申請してください。

(3) 年二回の大会開催時に合わせて発行される本『中国出土資料學會會報』は、新しい学術情報をできるだけ早く提供することを目的として編集されています。

会員各位におかれましては有益な情報を入手されたら、是非とも会報委員会に原稿の提供をお願い致します。中国における最新の学界動向、遺跡発掘の様様、学会参加記、新刊紹介など、広く提供するに足ると感じられた情報であれば何でも結構です。

原稿は随時受け付けておりますので、事務局宛電子メールの添付ファイルとしてお送りください。会報の内容を一層充実させるため、会員諸氏のふるってのご寄稿をお待ちしております。

○機関誌委員会より

(1) 機関誌『中国出土資料研究』の投稿は紙媒体・郵送による方式を停止し、当面下記の通り行います。ふるってご寄稿願います。

・ご投稿の際は、メール（宛先：office@shutsudo.jp）で玉稿の電子データをお送り下さい。郵便で紙媒体等をお送りになっても受理いたしかねます。

・ファイル形式は、WORD（～.docx または、～.doc）形式です。外字は画像データ貼付でお願いいたします。

・文書のレイアウトは、WORD 横書きの標準的なものでお願いいたします。

レイアウトを機関誌のそれに合わせないで下さい。

・図表が含まれるなど、WORD ファイルのみでは玉稿の正確な内容が反映されないのであれば、そのような PDF ファイルもお付け下さい。

(2) 『中国出土資料研究』第25号の締切について

2010年度大会(2011年7月16日開催)および2011年度大会(2012年3月10日開催)にて、『中国出土資料研究』の投稿要領改定が承認されております。第25号の投稿締切日は、2020年12月末日です。ふるってご寄稿下さいますよう、お願い申し上げます。

(3) 『中国出土資料研究』の奥付について

機関誌では、その奥付記載発行日と実際の出版日との間のずれが大きいことに由来する問題が生じておりました。そこで、第20号からはその日付を一致させることになりました。最新第24号の奥付は2020年7月発行となっております。

○事務局より

(1) 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響により、事務局では従来通りの作業が困難になっております。この状況に鑑み、大会案内等紙媒体の送付を当面停止し、学会ウェブサイトとメールでご連絡することといたしました。近日中に、今回の当学会の対応についてご説明する文書を機関誌に同封してお送りいたします所存です。皆様には大変なご不便をお掛けして誠に恐縮ですが、どうぞお許しいただきますようお願い申し上げます。

(2) 払込みにて年会費の納入をご希望の方は、ゆうちょ銀行の以下の口座にご入金下さい。

口座番号：00180-5-13124 受取人：中国出土資料学会

なお会費は、
通常会員・準会員 年額4000円
学生会員・海外会員 年額2000円 です。

(3) 住所変更等が生じた場合は、メールにて下記アドレス宛にご連絡下さい。

office@shutsudo.jp

(4) 2020年度より、会員名簿の発行は2年に1度、奇数年のみとしておりましたが、上記の方針により会員名簿の送付を当面停止いたします。